

『異聞・シーシュポスの神話』

作・平賀美咲

## 作品概要

2019年7月24日

『異聞・シーシュポスの神話』 平賀 美咲

### ・舞台設定

オンライン学習の普及により、毎日の通学がなくなった近未来、とある私立高校が物語の舞台となる。2020年に始まった教育改革がさらに進み、全国の高校生に無償で高性能WEBカメラ付きタブレット端末が配布された。これにより、一部の高校では生徒が通学せずに単位の取得が可能となり、生徒は年間を通して数日だけ登校すればよくなった。しかし、一定の成績に満たない者には補習のための通学が義務付けられている。

### ・あらすじ

生徒たちは自宅でタブレットを眺めながらオンラインで1学期の終業式を迎える。主人公はマキ。真面目な性格のはずだが、今回初めて夏休みの補習にかかってしまう。

登校したマキと他の補習組は、校内でスコップを持って穴を掘っている謎の青年（タクマ）に出会う。補習組は興味津々だが、タクマはまともに取り合わない。その後、補習の追試ではマキだけが不合格となり補習授業が続く。補習組までいなくなり、ついに校内にいる生徒はマキとタクマだけになった。マキはタクマに自分の本心を打ち明ける。すると、タクマは穴を掘っている理由を初めてマキに教えた。

次の日、自分にも穴を掘らせて欲しいとマキが体育館裏にやってくる。しかしタクマの姿はもうそこになかった。

### ・作品創作の背景

私は2週間前まで高校の演劇部に所属していました。私の高校では今年から部活動の改革が行われ、演劇部も活動時間が大幅に短縮されました。それもあってか、今夏の大会は本校OBの方が書き下ろした台本で出場することになりました。もちろんその台本を生徒が「自由」に変更して創作台本として上演するのが台本採用の条件でした。私は演出として部員の意見をまとめ、自分が中心となって台本の変更を提案しました。ところがそれらの意見は顧問、OBから却下され、ほぼ書き下ろしのまま地区大会での上演が決まりました。さらにその劇を生徒による創作台本として出場することになりました。私はどうしても、そうした部の方針に従うことができず、退部の決断に至りました。

私は退部を後悔していませんが、大会用の台本を胸を張って自分達で創作したと言えるものにできなかったことをとても後悔しています。もちろんその原因が私の能力不足によるものだと理解しています。しかし、台本にもっと真剣に向き合うべきでした。また、自分でも台本を最後まで書いてみるべきだったと痛感しました。

私はこの作品を退部後2週間で完成させました。今夏の大会での上演を目標に、去年の冬から書き始めた未完の作品でした。私は今回の体験を通じて「自由」には様々な種類のものがあることを知りました。そして、ギリシャ神話の「シーシュポスの自由」を自分なりに解釈して、今回初めて知ることになった辛い「自由」を表現してみました。

登場人物

マキ  
サラ  
シヨウ  
ミナ  
ワタル  
タクマ

補習を受ける高校二年生

ひたすら穴を掘る青年

OP

幕が上がると舞台中央で、一人の青年（タクマ）が穴を掘っている。そこへ、重そうなりュックを背負った数人の高校生がやってくる。

アドベンチャー系の音楽。

生徒達、弁当袋や部活の道具を持ってひたすら歩く。灼熱の砂漠を彷徨うように歩き続ける。

生徒 現在。  
生徒 5時半起床。  
生徒 ねむーい。  
生徒 満員電車、  
生徒 だるーい。  
生徒 重い荷物、  
生徒 つらーい。  
生徒 毎日、  
生徒 毎日、  
生徒 毎日。  
生徒 こんなのに、意味ないよ。  
生徒 うん、疲れるだけ。



生徒 サイコー！  
生徒 ええ〜  
生徒 うそ、全然会えないじゃん。  
生徒 やだよ。

生徒全員 え？  
生徒 学校、来てもいい？  
生徒 (間をおいて) 自由…。

生徒 すごい！  
生徒 昼まで寝れるじゃん！  
生徒 イベントは残ったままだった！  
生徒 わーい！  
生徒 この時代に生まれてよかった！  
生徒 自由！  
生徒 自由！  
生徒 自由！

音楽はパソコンのタイピングの音が混ざっているよ  
うな電子音に変わる。  
生徒達は上下にはけていくが、入れ替わりで私服の  
生徒達が入ってくる。  
彼らの手にはタブレット。  
全員舞台上に座る。寝ころがっている者もいる。

生徒 やっほー！  
生徒 やっほー！  
生徒 今日学校行くー？  
生徒 えー、暑いじゃん。  
生徒 やめとこうよ。  
生徒 そだね。

生徒 明日学校行こうかな。  
生徒 私、午後から行くよ。  
生徒 用事あるの？  
生徒 うん、午前はサッカーのクラブチームがあるん

生徒　　だ。  
生徒　　そうなんだ！  
生徒　　私も明日クラブ行こうかな！  
生徒　　うん！  
生徒　　また明日ね！  
生徒　　うん！　　ばいばーい。

1場

アラームの音。

舞台中央の装置上に大きな液晶パネルに見立てた枠。

生徒たちはそのまま舞台上に残り、リラックスして自宅にいるような感じを表現をする。それぞれ、タブレットを眺めている。

パネルの中に担任が登場する。

担任　　おはようございます。ただいまより、一学期終業式を始めます、礼。明日から夏休みですが、みなさん、どんな計画を立てていますか？  
生徒　　海外旅行に行きます！  
担任　　いいですね！  
生徒　　（パネルに向かって）どこ行くの？  
生徒　　ハワイだよ！  
生徒　　いいなあ。  
生徒　　私は職業体験をします！  
担任　　佐藤さんは、プログラミング専攻ですね。  
生徒　　はい！  
生徒　　俺は課題が多くてそんな余裕ないや。  
生徒　　私は一学期頑張ったから楽々  
担任　　ところで皆さん、一学期のまとめのテストの結果

生徒 果はみましたか？

生徒 うっ！

生徒 思ったより悪かったよ

生徒 私も

生徒 僕は成績上がった！

生徒 すごい！

生徒 皆さんご存知だと思いますが、一定の基準に満

担任 たなかつた人は…

生徒達 (一斉に被せて) 補習授業だ

生徒 うわ

担任 登校して、授業を受けてもらいます。

生徒 俺、絶対補習。

生徒 うそだ

担任 残念ながら、追試に合格するまで夏休みはお預

生徒 けです。

生徒 俺の夏休みが…。

担任 では、登校する生徒を発表します。出席番号3番

今田サラさん。

11番、関口ミナさん。

28番、成瀬シヨウ君。

32番、橋本ワタル君。

35番、藤原(生徒たちがパネルの方を向く)

：藤原マキさん。

生徒 えっ！

生徒 (パネルに向かって) あれ、藤原さんって頭いい

生徒 んじゃない…。

生徒 うそ

担任 以上です。登校は8月1日からです。該当者には

随時、連絡が入ると思うので、しっかりと確認し

て下さい。補習にかからなかった人も、有意義な

夏休みにしてくださいね。では、一学期終業式を

終わります。礼。

生徒 いえーい！夏休みだー！

生徒 遊ぶぞー！  
生徒 うおー！

補習にかからなかった生徒、舞台から適当にはけていく。

2場

補習組が教室にいる（そのまま残る）。

サラ あー、だるい。  
ミナ なんで夏休みなのに学校来てるんだろー  
ワタル 家でゲームしたい。  
シヨウ 暑いー  
サラ 暑いー  
ミナ 暑いー  
マキ以外 暑いー：  
マキ クーラーついてるよ？  
ミナ うっそだあ。  
ワタル もっと温度上げてよ。  
マキ みんな、元気出して。  
サラ いや、補習で元気とか、ありえないから。  
マキ そっか……。ごめん。  
サラ いや、謝られても困るし。  
マキ （間をおいて）ごめん。  
シヨウ 藤原さんがかわいそうだろ。  
サラ は？  
シヨウ すみません。  
ワタル こわ。  
サラ は？  
ミナ まーまー、ピリピリしないでよ。  
ワタル あ、メールきてる。



ショウ 本当だ、パネルの電源を入れろだって。  
サラ めんど。  
マキ 私やるよ。  
ミナ ありがとー  
マキ あれ？  
ミナ どうしたの？  
マキ いや、電源が…。  
ワタル ああ、ここだよ。  
マキ ありがとう。  
ショウ 変なところにあるなあ。  
ワタル んー、結構古いね、この型。

舞台中央の液晶パネルに再び担任が映し出される。

担任 おはようございます。さあ、補習授業へようこそ。  
ミナ この夏は頑張つて、成績を上げましょう！  
サラ はい。  
（間をおいて）はい。  
ショウ まあ、どうせ上がらないけど。  
担任 成瀬君。みんなやればできるんですよ。  
ミナ やれば、できるんですよ。  
担任 ではまず、授業アイコンをタップして。  
マキ 先生。  
担任 なんですか、藤原さん。  
マキ あの、補習授業つて、どういう風に進むんですか？  
ショウ あ、そうか。藤原さんは初めてか。  
ミナ え、成瀬君は…。  
ショウ 2回目く。  
ミナ うっそー。  
ショウ ほんとー。  
ワタル 今田さんもでしょ？  
ミナ えっ！  
サラ そうだけど。  
ミナ 何回目？

サラ 4。  
ミナ おく。  
ショウ はっ、先輩だ！  
ワタル おお  
担任 主に映像授業で勉強します。基礎の科目なので、みんな同じ授業を見てもらいます。  
マキ なるほど。  
サラ あ、あの手抜き動画ね。  
ミナ 手抜きって。  
サラ まあ、見ればわかるよ。  
担任 30分の動画を一日8本、がノルマです。授業アイコンをタップして始めて下さい。もちろん8本以上観てもかまいませんよ。  
ワタル めんどくさー。  
担任 では、終礼でまた会いましょう。  
ミナ さよーならー。

担任、液晶から消える。

ミナ 意外と大変なんだねー。  
ワタル ね。  
ショウ どうせ成績なんて上がんねえのにさ。  
マキ わかんないよ？  
ミナ えー？  
マキ 補習っていう状況があることに感謝しないと。  
サラ うざ。(ヘッドホンをつける)  
ミナ まあまあ。  
マキ もう授業始めるよ。  
ワタル あ、選べるんだね、授業。  
ショウ 楽そうなのにしよぜ。  
ミナ 先生がかっこいいのがいー  
マキ 数学は？  
ミナ 苦手ー。  
ワタル 俺もー。  
マキ 他の授業は…。

ワタル もう、これでよくない？

マキ 英語だね。

シヨウ いいよ。

講師 A (小さい声で) こんにちは。補習授業・英語です。

担当の牧野です。

ミナ 小っちゃや！ 声小っちゃ！

ワタル 大きくできるでしょ。

ワタル、タブレットを操作する。

講師 A (大声で) S！ V！ O！ C！の形！

サラ うるさい。

シヨウ へいへい。

講師 A (普通に) 英語には様々な形があり、今回やるの

は、(口調を変えて) アイ！ メイド！ ヒム！

サーツド。の形です。

シヨウ なんだコイツ。

ミナ 急にキャラ変したね。

講師 A わかりやすく説明をすると… (話し続ける)

ミナ ふわー。

ワタル ゲームしたい。

2人 はあ…。

しばらく授業映像を観ているが、マキ以外はすぐに飽きてくる。

シヨウ なあ、面白いこと教えてやるよ。

ミナ え、なにになに？

シヨウ これさ、早送りできるんだよ。

ミナ ええっ。

シヨウ ほら。

講師 A (早口で) というわけで単語と単語の…

マキ えっ、なに？

ミナ すごい！

シヨウ だろ。遅くもできるぞ。

講師 A (遅く) が大切になってきます。  
ミナ 変なのー。  
マキ ちよつと、やめてよく。  
ワタル ごめんごめん。  
マキ 真面目に聞こうよ。  
シヨウ つまんなくね？  
ミナ ね！ つまんなーい。  
マキ そうかなあ：  
サラ 他のにすればいいじゃん。  
ミナ うん、そうしよう！  
マキ ええ：  
ワタル 主要教科以外はないの？  
マキ ないでしょ。  
ワタル えー：  
ミナ なんで？  
ワタル いや、ITとかアプリの勉強だったら楽しいじやん。  
ミナ なるほどね！  
シヨウ え、お前進路そっち系？  
ワタル あー、：いや、専攻は、い、医学コース。  
ミナ えーっ！  
シヨウ へえー。  
マキ すごいねえ。  
ワタル いや、家が病院だからさ。  
ミナ エリートじゃん！  
サラ エリートなら、こんなとこいないでしょ。  
ワタル うーん、そうなんだよね。  
シヨウ まあ、そうか。  
ミナ 大丈夫、なんとかなるって！  
ワタル うーん。  
マキ それで、授業どうする？  
ミナ もう見たくなーい。  
シヨウ 全部早送りで見ようぜ。  
ミナ いいねく！  
ワタル さんせーい！

マキ だめだよ。  
ミナ えく。  
シヨウ いいんだって。俺、前もそうしたし。  
マキ でも自分のためにならないよ？  
シヨウ あー……。いやさ、  
ミナ 化学がいいな！  
ワタル いいよ。  
ミナ 化学の先生って、かわいいんだよね。  
シヨウ わかるそれ！  
マキ あ、始まつちやう。

セリフなしで授業を受けるシーン。  
マキだけは授業を真面目に受けているが、他は好き  
勝手に過ごしている。

ワタル ふうー。終わった。  
ミナ 全然聞いてなかったじゃん！  
ワタル 人のこと言えないだろ。  
ミナ あ、そっか。  
マキ 次はどうする？  
ミナ 休憩しようよ。  
マキ だめ。もう一個だけ！  
ミナ ええく。  
マキ 政治経済とか？  
シヨウ 政経？  
ミナ いやなの？  
シヨウ 嫌って言うか……。  
ワタル あれ、シヨウって専攻、政治って、言ってなかつた？  
シヨウ そうだよ。  
マキ じゃあ得意でしょ。  
シヨウ まあ、そうなんだけど。  
ミナ そういえば成瀬君ってさ、ここら辺で有名らしいね！  
マキ え？

ミナ　　なんでだっけ？  
ワタル　あー、えっと、なんかのスポーツで…。  
シヨウ　陸上な。  
ミナ　　そうそう！  
シヨウ　でも、もうやめた。  
三人　　…。  
シヨウ　まー、今はどうでもいいからさ！  
ミナ　　そっか。  
マキ　　（間をおいて）ミナちゃんは？  
ミナ　　へ？  
マキ　　ミナちゃんは、美容師になる！とか言いそうだなあつて。  
ワタル　確かに。  
ミナ　　えええ。  
シヨウ　専攻は？  
ミナ　　経理コース。  
マキ　　そうなんだ。  
ミナ　　大きな会社に就職できればいいかなうって。  
ワタル　意外にしっかりしてる。  
シヨウ　そうだな。  
ミナ　　意外にって何？  
シヨウ　あははは！  
サラ　　ねえ。  
マキ　　どうしたの？  
サラ　　さっさと授業やって帰らせてよ。  
マキ　　（間をおいて）ごめん。  
ワタル　いいじゃん別に。みんな話してたんだから。  
シヨウ　空気読めよな。  
サラ　　そっちも早く帰りたいうって言ってたじゃん。  
シヨウ　それはそうだけど。  
ワタル　なあ。  
サラ　　そんなに遊びたいなら外で遊べば？  
ワタル　なんだよー。  
シヨウ　はいはい、わかりました。  
マキ　　ちよっと、どこ行くの？

ショウ 遊びにいこーぜ！

ワタル おう！

ミナ 私も、行っちゃおうかなー。

マキ ミナちゃん？

ミナ マキちゃん、ごめん！

三人、教室から出ていこうとする。

マキ ダメだつて！ ちよつと！

三人とも小走りで去る。

マキ もー…。

マキ、サラを気にする。

サラ …何？

マキ え？

サラ そんなに見て、なんか言いたいことあんの？

マキ いや、なんでもないけど…。

サラ じゃあ見んなよ。

マキ (間をおいて) ごめん。

二人の間にしばらく沈黙が続く

マキ (間をおいて) なんでそんなに喧嘩腰なの？

サラ 別に。

マキ 私のことそんなに嫌い？

サラ 別に。

マキ じゃあ何なの？

サラ 私は、あんたの「私いい子です」って顔がイヤなだけ。

マキ そんなこと、

サラ ある。私はこんなところにいる人間じゃないって思ってるくせに。

マキ …。  
サラ ま、でもそれだけ真面目にやって結局補習とか、  
マキ 本当不憫だわ。  
マキ …。  
サラ なにその目。なんか言いたいなら言えば？  
マキ なんでもないよ。

\*

\*

\*

シヨウ・ワタル・ミナが何かから逃げるように戻つてくる。

シヨウ やばい、やばい。  
ミナ どうしようどうしよう！  
マキ なに、どうしたの？  
ワタル お、お、お、おぼけが、  
マキ え？  
シヨウ だから、おぼけがいるんだよ！  
マキ お、おぼけ？  
三人 うん。  
マキ ふうん。

三人、ずっこける。

マキ え、おぼけだよね？  
ミナ そうだよ！ O B A K Eだよ！  
シヨウ そのの、体育館裏に！  
マキ 見たの？  
ワタル うん。今でもまだふるえてる。  
ミナ 私も。  
サラ そんなのいるわけないでしょ。幼稚かよ。  
ミナ ほんとにいたんだってばく！  
マキ ほんとく？  
シヨウ そんなに信じられないなら、見に行くか？  
マキ いいよ、行かなくて。



ワタル 来てよ！ 今田さんも！  
サラ は？  
ミナ サラちゃんだったら、倒してくれそうだし！  
サラ 意味わかんないんだけど…  
シヨウ ほら、行くぞ！  
マキ えええ。  
ワタル 早く！  
マキ 授業、あるんだけどなあ

暗転する。

3場

体育館の裏の近くに補習組5人がやってくる。  
泥だらけになって、何かをしている青年（タクマ）  
を見つける。

シヨウ あ、あれだ！  
マキ え？  
ワタル 怪物だよ、土の中に眠ってたのが覚醒して這い  
上がってきたんだ！  
ミナ 怖いこといわないでよお  
ワタル ぼこぼこぼこくって！  
ミナ いやだー！  
シヨウ 呪われる！

サラ は？ あれ人じゃん  
サラ 以外 え？  
マキ あ、ほんとだ。  
ワタル だって槍を持ってて…。  
マキ いや… よく見たらスコップだね。  
ワタル うそ！  
ミナ なんだ

シヨウ 面白くねえ。  
マキ でもなんでスコップ？  
シヨウ ほんとだ：  
ミナ こっちにも気づいてないよ。  
ワタル もしかして：やばい奴なんじゃない？  
マキ やばい？  
シヨウ だ、誰か話しかけてみろよ。  
ワタル お、俺？ やだよ。

それぞれ順番にサラの後ろへ隠れる。

サラ ちよつとあんた！  
マキ え、ちよつと今田さん！  
ワタル 気づかれてないうちに逃げよう。  
シヨウ うん。  
サラ ちよつと、聞いてんの？ その穴掘ってるやつ！  
ワタル おい！  
ミナ もう逃げられないよ

タクマがゆっくりと振り向く。  
それでもなお、穴を掘り続ける。

サラ あんた誰？  
タクマ (間をおいて) 磯貝。  
マキ なにしてるんですか？  
タクマ (間をおいて) 穴を掘ってる。  
マキ どうしてここに？  
タクマ ……  
ミナ ……  
タクマ ……  
タクマ ……  
シヨウ ……  
ワタル ……  
タクマ ……  
サラ ……

あんに聞いてんだけど。  
あんに聞いてんだけど。

タクマ（間をおいて）少し静かにしてくれないか。

補習組は顔を見合わせる。

ミナ（意を決して）こここの、学校の人ですよね。

タクマ ……。

ワタル あ、あの、

タクマ いいから、どつか行ってくれ。

マキ みんな、行こう。

シヨウ うん。

ミナ もうすぐ授業だしね。

マキ以外の補習組、タクマを気にしつつ教室に戻っていく。

タクマは補習組が帰ってからも穴を掘り続ける。

場転中に数日過ぎたこと（シーシュポスの格好をしたキャストが大岩を運ぶ）を表現する。

#### 4場

シヨウ、ミナ・ワタルが忍び足でタクマのところへやってくる。

ミナ あっ、今日もまた掘ってる。

ワタル ほんとだ。

シヨウ こんな、あつついのに…。

ワタル なにやっつてんだろうなあ。

ミナ 声、かけてみる？

ワタル えっ。

ミナ やめる？

ワタル また怒られないかなあ。



ミナ うん。  
ワタル まあ、何となく気になるのはわかるけどさ。  
ミナ でしょ？

サラがタクマたちのところへやってくる。

ミナ あっ。

ワタル 今田さんだ。

サラ (タクマをさして) まだ掘ってんの？

シヨウ うん。

サラ ったく。…これ、水(タクマに渡す)。

タクマ …。

サラ 別に毒なんか盛ってないよ。

タクマ どうも。

サラ ねえ、そこ、宝でも埋まってんの？

ミナ あ、それ思った！ 平成のテレビでよくあるやつ。

ワタル そうなんですか？

タクマ …。

シヨウ じゃあ…タイムカプセルとか？

タクマ …。

ミナ …人？

タクマ そんなわけないだろ。

サラ じゃあ何で掘ってんのよ。

タクマ 理由は…ない。

サラ はあ？ あんた、頭おかしいんじゃないの？

シヨウ おいおい。

タクマ そうかもしれない。

ワタル えっ。

ミナ 意味わかんない。

タクマが再び穴を掘り始める。

ワタル この穴、そんなに深くないね。

サラ あれ、ここ、埋められてんじゃないん。

ミナ ほんとだ。  
ショウウ 誰かにやられたんですか？  
タクマ いや、自分で埋めた。  
サラ はああ？  
ミナ どういうこと？  
タクマ 何回も掘って、何回も埋める。その繰り返し…。  
サラ …。

タクマは力強く掘る。  
四人のうち、特にサラがじっとそれを見つめている。

サラ ねえ…。  
タクマ …。  
サラ ねえ！  
タクマ なんだよ。  
サラ あのさ。  
タクマ …。  
サラ 私にも、掘らせてくんないかな。  
ミナ えっ。  
タクマ …。  
サラ ダメ？

タクマがサラにスコップを渡す。

サラ いいの？  
タクマ (ハケながら) 勝手にしろ。

タクマが去っていく。

ワタル どうしたの、いきなり。  
サラ え？  
ワタル いや、急に掘るとか言いだして。  
ショウウ そうだよ。

サラ あんなに掘ってて、何も理由ないって、意味わか

んないじゃん。掘ってみなきや、何にもわかんないでしょ。

ワタル おお…。

シヨウ なんか、かつこいい。

サラ うるさいな。ちよつと黙ってて。

シヨウ・ワタル・ミナは少し下がる。

サラ、ぎこちない様子で穴を掘り始める。

サラ、無心で掘る。空を仰ぐ。

液晶パネルの枠がゆっくりと舞台中央に下りてくる。枠に中学生のサラが現れる。

サラ（中学生） おばあちゃん！ 来たよー！ 聞いてよ、またお母さんがさあ。もう本当に小言ばーっかり！ うん。…まあね。それにしたってさあ！

おばあちゃん！ ただいまー。わー、肉じゃがだ！ オヤジは？ またかよ。出張ばっかじゃん。え？寂しくないし。マジで最近うざい。…（怒られる）でも、…ごめん。

おばあちゃん！ お母さんまだ帰ってきてないの？ ……ったく。ねえ、聞いて！ 音楽満点だった！うん！…え？あー…。お母さんは、歌上手くても何の役にもたたないでしょって。…はは。ありがと。

おばあちゃん。おばあちゃん。おばあちゃん、大好き！ おばあちゃんだけだよ、私のことわかってるの。おばあちゃん。

（電話の音）

サラ もしもし？ お母さん？ 何？ え？  
嘘でしょ？

看護師現れる。

サラ おばあちゃん！ 大丈夫？！  
看護師 今は眠っています。  
サラ おばあちゃんは、大丈夫なんですか？  
看護師 …。きつと助けます。だから…大丈夫。  
サラ ほんとうに？  
看護師 …ええ。

サラ おばあちゃん。今日はねえ、またお母さんに怒られたよ。もうやんなっちゃうなあ。私だって頑張ってるのにさ。

看護師 こんにちは。  
サラ あ、ども。  
看護師 ほとんど毎日来てるわね。  
サラ あ…、それは看護師さんも。  
看護師 それは仕事だもん。  
サラ あ、そっか。はは。  
看護師 ふふ。

少しの間。  
心電図のアラーム音が鳴る。

サラ …おばあちゃん？  
看護師 後藤さん、後藤サヨさん！ 先生、…。  
サラ ねえ、おばあちゃんが…！  
看護師 大丈夫。大丈夫よ。  
サラ …うん。

看護師、てきぱき動く。  
看護師が動きを止める。



サラ、思わずスコップを放り投げる。

サラ やだ！！！！

ミナ え？

ワタル 何、どうした？

サラ やだ、思い出したくない！

シヨウ 思い出す？

ワタル 何を？

サラ ふざけんな！ 何、今の。

ワタル 知らないよ。

ミナ どうしたの？ 変な夢でも見た？

サラ 違う。

シヨウ じゃあ何なんだよ。

サラ もう、やだ。

シヨウ は？

サラ やだ、やだ！

ミナ 何が？

サラ 私、ここから出て行く。追試なんてどうにでもなるし。いや、どうにかする。あんたたちももう帰りたいでしょ？ さっさと追試受けるよ。

ワタル え？ え？

ミナ 急にどうしたの、ほんとに。

サラ いいから。

ミナ 良くないよ。

サラ 私だってわかんないんだってば。

シヨウ え？

サラ 思い出したくないことを、思い出しそうだった。

ミナ (間をおいて) うん。

サラ なんてか知らないけど、すごいぞわっとした。気持ち悪い。こんなところ、さっさといなくなりたい。(間をおいて) うん。

ワタル とにかく、早く出て行きたい。

ワタル う、うん。

シヨウ まあ、追試は、全員一斉なら受けられるから。

ミナ そうなんだ。

シヨウ うん。

サラ あんたたちも帰りたいでしょ？

ミナ まあ： うん。

ワタル うん。

サラ じゃあ追試受けよ。

シヨウ いいけど。

ミナ でも、マキちゃんは？

シヨウ あの人、真面目だし、準備できてるんじゃない？

ワタル 確かに。

ミナ そうだね。

サラ ていうか今どこにいるの？

ミナ 教室で補習受けてるでしょ。

サラ ああ。

ワタル でも、どうやって合格するんだよ。

ミナ え？

ワタル 俺たち、全然勉強してないだろ。

ミナ そうじゃん！

シヨウ それは当然、

サラ カンニング、しかないでしょ。

ミナ・ワタル ええっ！

ミナ カンニングするの？

シヨウ うん。

ワタル うん、じゃないだろ。

ミナ いいの？

シヨウ 良くはない、ていうかダメ。

ミナ ええ〜。

サラ でもこの際、手段を選んでる暇なんかない。

ワタル ええ、でも：。

ミナ ねえ。

シヨウ (ため息をついて) あのなあ、お前ら。

ワタル なんだよ。

シヨウ 教室には、先生はいない。

ミナ うん。

シヨウ 監視カメラなんてあるか？

ワタル ない。

シヨウ つてことは、俺たち、自由なんだよ、何しても。

ワタル おお。

シヨウ 先生たちはな、こーんな落ちこぼれの俺たちのことなんか、相手してる暇ないわけ。

ミナ そうだね。

シヨウ じゃあ、とつととカンニングでもなんでもやって、さつさと帰った方がいいだろ？

ミナ そっか！

ワタル なんで今まで言わなかったんだよ。

シヨウ それは、授業とかで、忙しかったし？

ワタル 受けてないだろ。

シヨウ どうせ俺、家についても勉強しねえし。

ワタル …。

暗転中に数日過ぎたこと（シーシュポスが運んだ大岩が山の頂上に見立てた舞台から転げ落ちる）を表現する。

その間、舞台上のマキ（途中から登場）・サラ・ミナ・シヨウ・ワタルは追試を受けている。

真面目に受けているように見えるが、互いにアイコンタクトをしたり、ジェスチャーで答えを教えあったりする。

シヨウはアイコンタクトの意味が分からなかったらしく、とうとうこっそりと立ち上がり、ワタルのタブレットを覗き込む。

マキが異変に気付き、横を見るが、シヨウはすでに自分の席に戻っている。  
再び、アイコンタクトをする。

サラ・ミナ・ショウ・ワタルがいる。  
教室ではない場所（体育館に行く途中の廊下）に  
いる。

全員 合格ー！！  
ショウ だから言っただろ。  
ミナ うん。  
ワタル こんなにうまくいくとは…。  
ミナ ね、ほんとに。  
サラ よかった、これで帰れる。  
ワタル うん。

マキ、現れる。

ミナ あ、マキちゃん。  
ショウ 追試どうだった？  
ワタル これで藤原さんだけ不合格とか、ないでしょ、  
マキ 不合格…：だった。  
ミナ え…。  
ワタル あ…：ごめん。  
ショウ 俺が最初に聞いたから…：ごめん。  
マキ ううん！ みんな合格だったんだね。  
ミナ うん。  
マキ おめでとう。みんな帰りたいてって言ったもん  
ね。よかったね。  
ショウ ありがとう。  
マキ おめでとう。  
サラ ほんとに思ってる？  
マキ …：思ってるよ。  
サラ ふうん。  
マキ 何？  
サラ なんでもない。ごめん。  
マキ …：うん。

マキ みんな、またね。

ミナ うん。

シヨウ 藤原さんならすぐ合格するよ。

ワタル そうだね。

マキ …うん。

サラ じゃあ。

マキ うん。

照明フェードアウト。

舞台が体育館裏に変わる。

四人、去ろうとする。

途中で何かに気づいたように動きを止める。

ミナ、舞台中央のスコップのあるところへゆっくりとやってくる。

ミナ 何かを、求めている。この会社で働く。この大学に行く。届かないところを目指してるわけじゃないし、未来は明るい。でも、全部決まっているはずなのに、私の心は言うことを聞かない。違う夢を見ている。本当は、私……。

シヨウ、舞台中央にやってくる。

シヨウ 何かから、逃げている。走った。たくさん走った。……走れなくなった。あの日、俺の時計は止まった。どうせ俺なんか、が始まった。こんなんだけど、本当は、俺……。

ワタル、舞台中央にやってくる。

ワタル 何かに、頼っている。親の病院。親の力。大きなものに背負われてきたけれど、俺は、いや、僕は、自分で何かを背負ってみたい。自分の手で作ってみたい。そうだ、本当は、僕は……。

サラ、舞台中央にやってくる。

担任や映像授業の講師たちが四人を見下ろす形でやってくる。

サラ 本当は、私……。そんなの、私にだってある。教育熱心な親に反発したくて、いろんな嘘をついてきた。バンドをやる、世界を旅する……。でも、おばあちゃん。ほんとの私は、やっぱりおばあちゃんの中にあつた。

四人 本当は、私たち……。

担任と数人の講師たちが大きな音を立てる。  
四人を見下ろす。

担任 みんな、わかっているよね。自由……。それは、そんなに甘くないの。不可能。無理なの。  
ミナ そんなことない！  
担任 無理。

ミナ、崩れ落ちる。

シヨウ 無理じゃない！  
担任・数人講師 無理。

シヨウ、崩れ落ちる。

ワタル でも、  
担任・数人講師 無理。

ワタル、サラ、崩れ落ちる。

担任・サラたち 無理。

サラ　みんな、帰ろう。全部、置いていこう。

マキ以外全員、舞台上からいなくなる。  
マキ、一人残される。

マキ　なんで…？　なんで私だけ？

行かないで…。  
行かないで！

6場

翌日の朝、マキがタクマの近くへやってくる。  
マキ、タクマが掘った土の塊に腰かけ、しばし無言。

マキ　みんな、いなくなっちゃいました。

タクマ　…。

マキ　昨日、追試があつたんです。私以外はみんな、合格しました。

タクマ　…。

マキ　勉強は、しました。

タクマ　…。

マキ　でも、全然できなかつた。途中までは分かつたんですけど、一問わかんなくなつたらもう、ダメな気がして。解かなきゃって考えるほど、頭がぐちゃぐちゃになつて、どんどん焦るんです。

タクマ　…。

マキ　なんで、私だけ…。

タクマ　…。

マキ　授業始めなきゃ。

タクマ　…。

マキ　はあ…。

タクマ、マキを見る。

マキ すみません。

タクマ …。

マキ 行きます。

タクマ …あ、

マキ え？

タクマ いや、

マキ、座り直す。

マキ ねえ、先輩。

タクマ …。

マキ 先輩って、夢、ありますか？

タクマ …夢？

マキ はい。

タクマ …。夢って、なんですか？

タクマ …。

マキ あはは。なんなんでしょうね。高1の最初、適正テストってありましたよね。AIだから絶対当たるとかいうの…。

タクマ (間をおいて) ああ。

マキ 私は、法律コースが向いてるって言われました…。先輩は？

タクマ 芸術。

マキ ああ。やっぱり結構当たるんですかね？

タクマ さあ。

マキ 私、弁護士になりたいんです。

タクマ …。夢あるじゃんって思ったでしょう。

マキ …。

タクマ (少し笑う)

マキ …。

タクマ …。



マキ　でも、たぶん、ないんです。  
タクマ　∴。

マキ　わからないんです。ミナちゃんたちは、本当は  
こういうのやりたいっていうのがあって、でも  
他のが向いてるから、そっちの勉強を仕方なく  
してたらしいんです。

タクマ　∴。  
マキ　だから成績悪くても全然気にならないみたい  
なんです。

タクマ　∴。  
マキ　でも、私は、こういうのやりたいっていうのすら、  
ない。

タクマ　（間をおいて）なんで？  
マキ　なんで∴？  
タクマ　∴。

マキ　だって∴。だって、それでいいと思ってたんです。  
お母さんがいいわよって勧めた高校だから入ろ  
うって思ったし、A Iが法律コースが向いてる  
っていうんだから、たぶんそうだし、法律コース  
の課題もちゃんとかなしたし、ずっと、まっすぐ、  
ほんとにまっすぐ、来たんです。

タクマ　（間をおいて）ふうん。  
マキ　私、間違ってますか？　なにがいけなかったん  
ですか？　あんな∴　だからだしたり、反抗し  
たりせずに、ずっと、頑張ってきたのに！

タクマ　∴。  
マキ　すみません。先輩には、分かってもらえないです  
よね。

タクマ　∴。  
マキ　なんで先輩は、穴を掘ってるんですか？  
タクマ　∴。

マキ　私、全然わかんないです。だって、意味ないん  
でしよう？　穴掘って、埋めて、穴掘って埋めて

つて……。馬鹿みたい。そんなの無駄じゃないですか。

タクマ 無駄？

マキ ……。

タクマ 無駄かどうかは、俺が決める。

マキ なにそれ……。

タクマ 俺が穴を掘ってるのは、

マキ ……。

タクマ 昔、穴を掘っては埋め、掘っては埋め、それを繰り返す刑罰があったらしい。

マキ ……。

タクマ それって、意味ないって思うだろ。

マキ ……はい。

タクマ 意味のない作業を続けると、人は死んでしまうらしい。

マキ ……死にたかったんですか。

タクマ いいや。

マキ ……。

タクマ 本当に死ぬのかな、と思って。

マキ ……。

タクマ 穴を掘らせている人は、掘るのを「刑罰」として与える。

マキ ……。

タクマ でも、掘っている本人は、自分が働いている、生きていくということ、喜び、自分を慰めているかもしれない。

マキ ……。

タクマ どう考えるかは本人の自由だ。

マキ よく……わかりません。

タクマ (黙って頷く)

長い静寂。

マキは座り込み、タクマが再び穴を掘るのを見ながら考え事をしている。

タクマ（手を止め）授業。  
マキ あっ、はい！

マキ、しばらくの間ぼうっとする。

マキ、去る。

タクマはずっと穴を掘る。

突然、顔をあげ、手を止めて空を見る。

初めは困惑した表情だが、徐々に満足そうな様子へと変わっていく。スコップを地面にさし、手を広げ、頭の上に掲げる。

こぶしを握り締め、長い溜息をつく。

タクマ、去る。

翌日、マキが体育館の裏にやってくる。

そこにタクマの姿はない。

マキ 先輩…？

スコップが地面に刺さっている。

マキ …。先輩…。

マキ、スコップを手取る。

マキ 自由…。

マキ、穴を掘り始める。

無言になり、夢中で穴を掘り始める。

高校生のマキ（単調に）藤原マキです。一七歳です。好きな食べ物、母の作ってくれたものです。趣味は、音楽鑑賞です。好きな曲ですか。そうで

すね、シヨパンが好きです。：私の生きがい？私の生きがいは、困っている人を助けることです。それもあつて、私は、弁護士になりたいと思っと思っています。

中学生のマキ（不安そうに）私、どうしたらいいんですか。進路が決まらないんです。：はい、でも……。それが、本当に自分のやりたいことなのか、分からなくなってしまうって。：そんな。でも……。  
（単調に）：はい。そうですね。私は、このままでもいいんですよ。なんか、変なこと言ってますみません。（小さく笑う）

舞台上の枠内に、マキ（小学4年生）と、クラスメイト、担任の先生が現れる。

担任　では、二分の一成人式の劇の台本は、藤原さんにお願ひします。

小4 マキ　はい！

友人　マキちゃん、すごいね。

小4 マキ　ありがとうございます。

担任　藤原さん、ちょっと。

小4 マキ　はい。

先生　あのね、お母さんお父さんも見に来るから、わかりやすく、あつたかい劇にしてね。

小4 マキ　あつたかい劇？

担任　うん。複雑だと、感動できないでしょう？

小4 マキ　はい。

担任　難しいかな。

小4 マキ　：。

担任　例えば、こんなのはどうか。このクラスに転校生が来て、あ、ほら、田中さんをモデルにして……。最初はあんまりなじめなかったけど、運動会でみんなの気持ちが一つになつて……。

小4 マキ　どこかで、聞いたことあります。

担任　：じゃあ、お母さんたちも来ることだし、日ごろの感謝を劇にしてみました？クラスのみんなも一人一言いえば、お母さんたち喜ぶでしょう。

小4 マキ　みんな、お母さんにありがとうって思ってますん。

担任　いいのよ、それでも。

小4 マキ　：。先生の話にした方がいいんですか？

担任　絶対とは言わないわよ。それはあなたの自由。

小4 マキ　：。

担任とクラスメイト、去る。

小4 マキ　私は：。

小4 マキ、劇を考える。書いたり、実際に動いてみたい。ひらめく。

小4 マキ　ただいまより、劇『地球の終わり』を上演します。4年3組藤原マキがお話をつくりました。それでは最後までお楽しみください。

A（小4 マキ）「私は、地球だ！　毎日ぐるぐる回っている。」

B　「おい、地球。」

A　「なんだ、火星。」

観客席（幕）から聞こえる笑い声。

B　「お前、ちよつと欠けているぞ。」

A　「えっ？」

C　「本当だ。かじられたみたい。」

A　「月だ！」

B・C　「えっ！」

A　「昨日、月が私を食べたんだ。」

C B C  
：おい、次。  
あっ！「月か。あいつは食い意地が張っているから。」

D A  
「い、痛い」  
「どうした、地球！」

A C  
「あ、水星！」

A C  
「いたたたた！」

A C  
「おい、お前、割れてるぞ！」

C B A C D A  
「地球の滅亡だあゝ」

観客席（幕）がざわつき始める。笑い声、どういこと？など。

D A  
：。

A D A  
おい。

A D A  
はっ、えーと、えーと。

C A D A  
ちよつと。

観客席（幕）から声援。

A B A  
「体が、痛い！でも、心は痛くない！」

A B A  
「地球——！」

A B A  
「今、地球にはいっぱい問題があります！」

観客席（幕）からざわめき。

D C  
「人種差別、貧困問題」

D C  
「地球温暖化、しゅんしえいう（酸性雨）」あ、嘯んじやつた。

観客、笑う。A以外の生徒も困ったように笑う。

A  
笑うな——！笑うな笑うな笑うな笑うな笑うな  
！

観客、静まる。

担任 藤原さん！

A（小4マキ）が担任に押さえつけられる。

マキ、静かになる。担任はマキ以外の生徒の輪に入る。マキは倒れていたが、顔を少しあげ、担任たちの方を見ている。

B 最悪ー。

C チョー恥かいた。

D 最初から変だと思ったんだよね。

E 劇に出た子がかわいそう。

担任 まあまあ。でも藤原さん、もう少し先生の話を

参考にしても良かったかもね。

マキ …。

B えっ、先生も考えてたの？

C どんな話？

担任 ええ？ えっとねー…。（自慢げに語り始める）

D ちゃんとしたのあるじゃん！

E えーっ。

C なんだあ、じゃあこれやればよかったじゃん。

B ほんとだよ、あんなのより全然面白いじゃん。

クラスメイト、去る。

担任は小4マキに背を向けている。

マキ（小4）待って…。行かないで。

小4マキ、座りこむ。

マキ（現在）つらかったね。

がんばったよね。

自分で、考えてみたかったんだよね。

小4 マキ、顔をあげる。

マキ（現在）私、これをなかったことにしてた。

ごめんね、忘れててごめんね。

：忘れてたフリして、ごめんね。

でも、ここにいていいから。

大丈夫。

私が、守るから。

マキ（現在）、小4 マキを抱きしめる。

心が変わり始めたマキの前に、今までマキがずっと信じてきた虚像が立ちはだかる。

虚像の意思と担任の意思が同化し、担任の口から言葉が発せられる。

担任 マキ、自由って、そんな甘くないよ。

マキ うん。

担任 知らないよ。

マキ …うん。私がまだ、ここにいるから、大丈夫。

担任 …。

担任、去る。

しばらくして、マキ（現在）と小4 マキがうなずきあい、小4 マキ去る。

マキは再び穴を掘り続ける。

雨が降り出す。

マキ、一度空を仰ぐが、もう一度掘り続ける。

ミナ マキちゃん！

シヨウ あ、藤原さん！



ワタル ほんとに穴掘ってる。

ショウ ウん。

ミナ だって本人から聞いたんだもん。

サラ こんな雨なのに：何やってんのよ。

ミナ マキちゃん、危ないよ！

マキ …。

風も雨もひどくなる。

≪黒子、舞台装置を少しずつ解体する≫

ショウ おい、本気で危ないって、おい！

マキ …。

サラ、舞台装置から飛び降り、マキに捕まる。

マキ …やめて。

サラ 馬鹿じゃないの、やめなっ！

マキ …。

他の三人もマキのところにやってくる。

ミナ マキちゃん！

サラ、マキをスコップからはがそうとする。

マキ うああああ！

今、自分が、自分になってるの。

考えたいの。

自由に、なりたいの！

あああああああああー！

補習組の4人はバラバラに去る（ふっとばされる）。

風や雨がやみ、静かになる。

マキの息遣いだけが聞こえる。

E  
D

舞台中央にスコップが一本刺さっている。  
穴の掘る音だけが響く。

— 幕 —